

社会福祉士養成課程における客観的臨床能力試験 (OSCE) の試行的実施と今後の課題

立石 真司・吉田 守実・大木 えりか・米田 政葉

要旨

本研究の目的は、社会福祉士 OSCE を試行的に実施し、試験結果や実習指導者のアンケート調査から、A 大学における OSCE の有効性の考察と今後に向けた課題について検証することである。すべてのインテーク面接を同じ事例を用いて実施した結果、学生間で点数のばらつきがみられた。アンケート結果では、学生にとっては有意義な経験であり、今後も継続して欲しいという肯定的な回答が得られた。運用上の具体的な課題としては、評価表は 5 段階評価がよいこと、面接時間は 10 分程度が望ましいこと等が挙げられた。今回の OSCE の試行的実施を通して、学生、養成校、実習施設・機関が三者協働することで学生の実践力向上につながる機会になり得ることが示唆された。

キーワード：社会福祉士養成課程、客観的臨床能力試験 (OSCE)、インテーク面接、試行的実施

I はじめに

近年、福祉専門職養成教育における客観的臨床能力試験 (OSCE: Objective Structured Clinical Examination, 以下、OSCE) の導入が、日本社会福祉士養成校協会北海道ブロック／北海道ブロック社会福祉実習研究協議会 (以下、北海道ブロック) を中心に取り組みがなされている (巻ら 2016 ; 巻 2023)。福祉専門職養成教育における OSCE 導入の背景には、①専門職としての質の担保と標準化、②臨床参加型実習への転換、③実習前評価システムとしての OSCE の必要性があることが指摘されている (長谷川 2014)。北海道ブロックでは、試験項目について、①インテーク面接、②アセスメント報告、③実習日誌記載・提出の 3 場面を設定し、各場面で必要とされる実践力を測定している (巻ら 2016)。こうしたそれぞれの試験によって、客観的な指標を用い、実習生として実習に参入するための事前に満たすべき条件を充足しているかどうかを事前に評価している。このように、北海道ブロックを中心に社会福祉士 OSCE の実践が 2011 年度頃から試行・実施されている (巻 2023)。

社会福祉士養成課程は、2021 年 4 月 1 日を施行日とした社会福祉士介護福祉士学校指定規則及び社会福祉に関する科目を定める省令の一部を改正する省令 (令和 2 年 3 月 6 日文部科学省・厚生労働省令第 1 号) に基づき、2021 年度入学生 (4 年生大学) から新カリキュラムが導入されており、実習と演習の充実が求められている。実習は、実習時間数を 180 時間から 240 時間に拡充し、機能の異なる 2 か所以上の実習施設で行うこととされた (厚生労働省 2019)。A 大学では、2021 年度入学制の 3 年次の 2 月に 60 時間、4 年次の 8 月に 180 時間を実施している。

そこで、本研究では、新カリキュラムにおける実習を実施するにあたり、社会福祉士 OSCE に位置づけられるインテーク面接の試験項目を試行的に実施し、A 大学における OSCE の有効性の

考察と今後に向けた課題について検証することを目的とする。

Ⅱ 研究方法

1 対象者

対象は、A 大学の社会福祉士プログラムの 2020 年度入学生（試験当時 4 年生）14 人及び 2021 年度入学制（試験当時 3 年生）6 人の合計 20 人である。

2 調査の実施日

1) 2020 年度入学生（4 年生）

旧カリキュラムの実習形態であり、23 日間、180 時間以上の実習を 8 月～9 月に実施する計画であったため、実習前である 2023 年 7 月 12 日（水）12 時 50 分から 16 時 00 分で実施した。

2) 2021 年度入学制（3 年生）

新カリキュラムの実習形態となり、60 時間以上の実習を翌年 2 月に実施する計画であったため、実習前である 2023 年 11 月 29 日（水）12 時 50 分から 16 時 00 分で実施した。

3 社会福祉士 OSCE の概要

巻ら（2014；2016；2023）の研究を参考に、以下の内容で実施した。

1) インテーク面接

インテーク面接は、試験時間 8 分（面接 7 分、要約 1 分）、評価者からのフィードバック 4 分、学生退室後に評価調整 3 分の合計 15 分間で実施した。設定は、地域包括支援センターに事前に電話予約があったクライアントとのインテーク面接場面とした。クライアント役は、当該年度に実習を受け入れる予定の実習指導者に依頼し実施した。

面接については 7 分間で実施し、クライアントを迎え入れる態度、基本的なコミュニケーションスキル、面接技法を確認した。そして、要約については 1 分間で実施し、面接を踏まえた家族環境やクライアントの主訴について、クライアント役評価者に報告を行った。

2) 評価方法及び評価者体制

インテーク面接に同席（観察）している評価者 2 名と、クライアント役評価者 1 名の 3 人体制で合議制を用いている（表 1）。なお、評価者は、内部評価者は教員、外部評価者及びクライアント役評価者が実習指導者という体制で実施した。

内部評価者である教員は 4 人体制、そして外部評価者およびクライアント役評価者は、合計 12 人の実習指導者に依頼し、役割分担を行い実施した。

表 1 評価者体制

試験項目	評価者体制	人数
インテーク面接	内部評価者（教員）	1 名
	外部評価者（実習指導者）	1 名
	クライアント役評価者（実習指導者）	1 名
	合計	3 名

3) 評価項目

評価表は、①評価者評価（内部、外部評価者共通）と、②クライアント役評価で、それぞれ別の評価表を用いた（表 2、3）。

評価者評価表（表 2）は、チェック項目は 17 項目に分類され、17 項目は「その他のチェックリスト」としてさらに 5 項目に分かれている。結果として合計で 21 項目となる。評価は、各項目 1 点から 3 点の 3 段階となっており、全て 3 点の場合は 63 点満点である。3 段階それぞれの評価基準は次のとおりである。「3」は適切（的確）であり、自然で違和感なし、丁寧に実行されている。「2」はまあまあ適切（的確）であり、実行されているが、ぎくしゃくしている。「1」は適切（的確）でないであり、使おうとしているが的外れ、対応しなければならないことをしていない。

クライアント役評価表（表 3）は、チェック項目は 6 項目に分類され、評価は、「3」は十分に、「2」はまあまあ十分に、「1」はそうとは言えないの 3 段階評価である。全て 3 点の場合は 18 点満点である。なお、評価表とインテーク面接における留意点については、学生に対して、事前のソーシャルワーク演習の授業の際に説明し、参考資料として配付した。

表 2 評価者評価 評価表

	チェック項目	評価段階	評価上のポイント
1	1 CL を迎え入れる態度	3-2-1	言葉かけ・動作等の丁寧さ・自然さ
2	2 椅子の勧め方と位置取り	3-2-1	言葉かけ・仕草・勧め方・位置取り
3	3 始めの挨拶と自己紹介	3-2-1	言葉・所属・職名・氏名・役割
4	4 面接への倫理的配慮	3-2-1	守秘義務の伝達・メモの了承
5	5 主訴の聞き取りの開始	3-2-1	面接開始の切り出し方
6	6 質問技法の的確さ	3-2-1	開かれた質問・閉ざされた質問
7	7 言語追跡の的確さ	3-2-1	相手の言葉・語りを丁寧に追う
8	8 語りの促進の的確さ	3-2-1	うながし（はげまし）・あいづち
9	9 反映技法の的確さ	3-2-1	感情の反映（意味の反映）
10	10 確認技法の的確さ	3-2-1	言い換え・繰り返しの技法
11	11 焦点の当て方の的確さ	3-2-1	焦点の当て方・焦点の移動
12	12 身体技法の的確さ	3-2-1	傾聴の姿勢・手足の位置／動作
13	13 視線の的確さ	3-2-1	相手の目・凝視しない・きょろきょろしない
14	14 音声の調子の的確さ	3-2-1	明確さ・高さ・速さ・抑揚
15	15 沈黙への対応の的確さ	3-2-1	待てる・促せる・問いに変える
16	16 主訴の要約と確認の的確さ	3-2-1	主訴の内容把握・伝え方・確認の取り方
17	17① 質問攻めではなかったか	3-2-1	
18	17② ワーカー側が沈黙に陥らなかったか	3-2-1	
19	17③ 早すぎる指示・助言等ではなかったか	3-2-1	
20	17④ メモ取りに集中していなかったか	3-2-1	
21	17⑤ 不適切な表現はなかったか	3-2-1	

出所：巻ら（2014）P4 を一部改編

表 3 クライアント役評価 評価表

	チェック項目	評価段階
1	クライアントは、気持ちよく迎えられたか	3-2-1
2	クライアントは、ソーシャルワーカーの役割を理解できたか	3-2-1
3	クライアントは、滑らかに相談関係に入れたか	3-2-1
4	クライアントは、相談事を十分に聴かれたと感じられたか	3-2-1
5	クライアントは、相談事を十分に話したと感じられたか	3-2-1
6	クライアントは、相談事を十分に理解されたと感じられたか	3-2-1

出所：巻ら（2014）P4 を一部改編

4 倫理的配慮

本研究は、一般社団法人日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守している。A大学の学生及び参加する実習指導者へ書面及び口頭にて研究協力を依頼し同意を得た。また、試験結果で得られた回答は統計的に処理を行い、個人が特定されないよう配慮することを説明し同意を得た。

Ⅲ 結果

1 評価者評価における結果

21 項目における対象者 20 人の評価の合計点数（63 点満点）は、最高 61 点（得点率 96.8%、以下、カッコ内は得点率）、最低 36.5 点（57.9%）で、24.5 点（38.9%）の点数の幅があった。全体の平均点は 49.3 点（78.3%）だった。平均点と最低点 36.5 点の差が 12.8 点、平均点と最高点 61 点の差が 11.7 点と 10 点前後の差があり、同じ事例でのインテーク面接を実施しているが、学生の評価に大きな差がみられた。表 4 は、対象者 20 人の評価者評価のチェック項目ごとの平均点である。最も平均点が高かった項目は、「17 質問攻めではなかったか」「19 早すぎる指示・助言等ではなかったか」「20 メモ取りに集中していなかったか」の 3 項目で平均点は 2.6 点だった。最も平均点が低かった項目は、「6 質問技法の的確さ」「11 焦点の当て方の的確さ」「15 沈黙への対応の的確さ」「16 主訴の要約と確認の的確さ」の 4 項目で平均点は 2.1 点だった。

2 評価者評価におけるブロックごとの結果

面接内容の結果を詳細に確認するため、長濱（2019）の研究を参考に、21 項目を以下の 3 つのブロックに分けて、評価得点の小計を算出した。第 1 のブロック（項目 1～5）を、利用者を迎え入れて面接を開始するまでの「面接の導入」とした。第 2 のブロック（項目 6～11）を、ニーズの確認とそれに係る面接技術として「主訴の聞き取り技法」とした。第 3 のブロック（項目 12～21）を、面接を受ける側に与える印象と相談のしやすさとして「面接の態度」とした。

小計の結果、まず、第 1 ブロックの「面接の導入」については、5 項目 15 点満点で、最高 15 点、最低 8 点、全体の平均は、12.1 点（80.6%）で 8 割程度の得点率だった。次に、第 2 ブロックの「主訴の聞き取り技法」については、6 項目 18 点満点で、最高 17 点、最低 10 点、全体の平均は、13.2 点（73.3%）で 7 割程度の得点率であり、第 1 ブロックの平均より下回った。最後に、第 3 ブロックの「面接の態度」については、10 項目 30 点満点で、最高 29 点、最低 17 点、全体の平均は、24.1 点（80.3%）で 8 割程度の得点率だった。以上、3 つのブロックで分類した

表 4 チェック項目ごとの評価者評価の平均

	評価項目	平均点	標準偏差
1	CLを迎え入れる態度	2.5	0.5
2	椅子の勧め方と位置取り	2.4	0.6
3	始めの挨拶と自己紹介	2.3	0.6
4	面接への倫理的配慮	2.4	0.6
5	主訴の聞き取りの開始	2.5	0.6
6	質問技法の的確さ	2.1	0.3
7	言語追跡の的確さ	2.4	0.5
8	語りの促進の的確さ	2.3	0.5
9	反映技法の的確さ	2.2	0.5
10	確認技法の的確さ	2.2	0.5
11	焦点の当て方の的確さ	2.1	0.5
12	身体技法の的確さ	2.5	0.5
13	視線の的確さ	2.5	0.6
14	音声の調子の的確さ	2.3	0.7
15	沈黙への対応の的確さ	2.1	0.5
16	主訴の要約と確認の的確さ	2.1	0.6
17	質問攻めではなかったか	2.6	0.5
18	ワーカー側が沈黙に陥らなかったか	2.5	0.6
19	早すぎる指示・助言等ではなかったか	2.6	0.6
20	メモ取りに集中していなかったか	2.6	0.5
21	不適切な表現はなかったか	2.5	0.6

結果、最も平均点が高かったのは、第1ブロックの「面接の導入」、次に第三ブロックの「面接の態度」、そして、最も平均点が低かったのは、第2ブロックの「主訴の聞き取り技法」だった。

3 クライアント役評価における結果

6項目における対象者20人の評価の合計点数（18点満点）は、最高18点（100.0%）、最低9点（50.0%）で、9点（50.0%）の点数の幅があった。全体の平均点は13.3点（73.9%）だった。表5は、対象者20人のクライアント役評価のチェック項目ごとの平均点である。最も平均点が高かった項目は、「1 気持ちよく迎えられたか」「3 滑らかに相談関係に入れたか」の2項目で、平均点は2.6点だった。最も平均点が低かった項目は、「4 相談事を十分に聴かれたと感じられたか」「5 相談事を十分に話したと感じられたか」の2項目で、平均点は1.9点だった。

4 実施後のアンケート調査結果

すべてのインターク面接終了後、外部評価およびクライアント役評価に協力していただいた実習指導者12人に、無記名で、OSCE全体を通しての感想や意見を、自由記述でアンケートを実施した。その結果、表6のとおり、①評価表のあり方、②面接時間の時間配分、③事例の内容、

④学生の力量、⑤今後の取り組みについての意見の 5 つのカテゴリーにまとめた。

表 5 チェック項目ごとのクライアント役評価の平均

評価項目	平均点	標準偏差
1 CL は、気持ちよく迎えられたか	2.6	0.5
2 CL は、ソーシャルワーカーの役割を理解できたか	2.3	0.6
3 CL は、滑らかに相談関係に入れたか	2.6	0.5
4 CL は、相談事を十分に聴かれたと感じられたか	1.9	0.6
5 CL は、相談事を十分に話したと感じられたか	1.9	0.6
6 CL は、相談事を十分に理解されたと感じられたか	2.1	0.5

表 6 全体を通しての感想・意見（自由記述）

カテゴリー	具体的な内容
①評価表のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5 段階評価の方が評価が行いやすい (2) ・ 尺度ごとの評価水準に迷いをもった ・ 実際に評価すると、中心化傾向になってしまうと感じる ・ 実施前にそれぞれの段階の考え方を確認できるとよい ・ 評価者同士のすり合わせの時間がとれるとよい
②面接時間の時間配分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7 分では短いと感じた (2) ・ 面接時間を 7 分から 10 分程度にしてもよいと感じる (2) ・ フィードバックの時間がもう少しあってもよい (2) ・ 面接時間がもう少し長いと、クライアントの主訴、不安、悩みについて、聞き取れるのではないかと感じた ・ うまく進められない学生にとっては、7 分が長い時間だと感じた ・ 限られた時間なので、主訴の聞き取りから展開してもよいと思った
③事例の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ もう少しシンプルな内容で良い ・ 事例が比較的複雑であるため、情報量が多く学生も評価者も確認に苦労したと感じる ・ 今回の事例は情報量が多く、その中で何を引き出すか学生にとっては難しいと感じた
④学生の力量	<ul style="list-style-type: none"> ・ 感情のレパートリー、語彙力が不足していると感じる ・ 面接場面で、経済的な情報にふれる学生が少なく、主訴の把握が表面的になってしまう印象を受けた ・ アセスメントの枠組みが実習に来てからわからない学生も多いのでもう少しアセスメントを学ぶ機会が必要 ・ 要約を誰に対して行っているのかが、あいまいな学生が多かった
⑤今後の取り組みについての意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生にとって、非常に有意義な経験であり、引き続き取り入れていって欲しい ・ OSCE はソーシャルワーク技術の確立に大切なので、今後も続けて欲しい ・ 学生が OSCE を経験できて良かったと思えるように、実習内容とリンクさせていきたい ・ 今後はより実践的な事例を扱い、実践力の向上を目指して欲しい

※ () の数値は、同一意見・感想の人数を表す

IV 考察

1 OSCE 試験結果から

第一に、評価者評価について以下に考察する。評価者評価は、対象学生1名に対して、内部評価者である教員1名と外部評価者である実習指導者1名の計2名体制で実施しており、学生が退出後に評価調整を行い評価者間で大きなズレがないよう配慮している。評価者評価の結果は、合計点数63点満点のうち、全体の平均点は49.3点（78.3%）だった。平均点49.3点と照らし合わせてみると、20人中10人が平均点を上回っていた。最高61点（96.8%）、最低36.5点（57.9%）で、24.5点（38.9%）の点数の幅があり、個々の学生の面接技術の知識・技術にばらつきがみられた。

評価のチェック項目では、面接場面を「面接の導入」「主訴の聞き取り技法」「面接の態度」の3つのブロックに分けて小計を算出した結果、以下の傾向が示された。まず、第1ブロック「面接の導入（項目1～5）」に関する技術は、平均得点率が80.6%と3ブロック中最も高かった。これは、事前に意識的に練習することが可能であり、一度身につくことで概ね安定した力を発揮することができたと考えられる。OSCE実施前の演習の授業を利用して、インテーク面接の練習をしており、学生もイメージしてそれなりに練習を積んできた様子だった。次に、第2ブロック「主訴の聞き取り技法（項目6～11）」については、平均得点率が73.3%と3ブロック中最も低かった。特に、「6 質問技法の的確さ」「11 焦点の当て方の的確さ」の部分で平均点が2.1点と最も低い点数だった。点数が低かった理由としては、インテーク面接の7分間では主訴の聞き取りまでたどりつかない学生が多くみられたことや、ニーズアセスメントが不十分であり、主訴に焦点を当てて聴き取ることができない学生が多かったことが影響していると推察される。インテーク面接を進めるうえで、主訴の聞き取り技法は、ニーズ把握やアセスメントの知識の習得と併せて豊富な経験と臨機応変な対応力が求められることから、経験値が少ない学生にとっては、難しさを実感した項目である。このように、「主訴の聞き取り技法」については、3ブロック中最も平均得点率が低かった。今後は学生に対して実習前の知識・技術の到達点を具体的に提示し、講義や演習を通してより実践的な学びの機会を提供する必要があると考える。最後に、第3ブロック「面接の態度（項目12～21）」については、平均得点率が80.3%と、第1ブロック「面接の導入」とほぼ同率だった。具体的な項目では、「15 沈黙への対応の的確さ」「16 主訴の要約と確認の的確さ」の平均点が2.1点と最も低い点だった。これは、第2ブロックの「主訴の聞き取り技法」と関連する内容であり、点数が低かったと考えられる。一方で、「17 質問攻めではなかったか」「19 早すぎる指示・助言等ではなかったか」「20 メモ取りに集中していなかったか」の3項目の平均点が2.6点と高かった。これらは、日頃の体験や基本的な対応の意識があることでそれなりに実践できる項目といえる。このように、同じブロック内で平均点が高い項目と低い項目が混在していた。その他の項目の「12 身体技法の的確さ」「13 視線の的確さ」「14 音声の調子の的確さ」など、非言語コミュニケーションに関する要素があり、これらも平均点が高い傾向を示しており、相対的に第3ブロックの平均得点率も良好になったものと考えられる。

第二に、クライアント役評価について以下に考察する。クライアント役評価者は実習指導者1名が、クライアント役になって、学生とロールプレイを行い、セッション後に評価を行っている。クライアント役評価の結果は、合計点数18点満点のうち、全体の平均点は13.3点（73.9%）だった。評価者評価における全体の平均得点率78.3%と比較すると、4.4%の差があり、クライアント役評価の平均得点率の方が低い傾向がみられた。具体的なチェック項目ごとでは、最も平均点

が低かった項目は、「4 相談事を十分に聴かれたと感じられたか」「5 相談事を十分に話したと感じられたか」の 2 項目で、平均点は 1.9 点だった。これらは、面接技術における価値・知識・技術と併せて豊富な経験も求められる項目であり、経験の少ない学生は、緊張と不安が先立ち、クライアント役が安心して相談できる体制を構築することができなかったことが影響していると考えられる。また、最高 18 点 (100.0%)、最低 9 点 (50.0%) で、9 点 (50.0%) の点数の幅があり、点数の高い学生と低い学生でばらつきがみられ、学生の資質によって評価が分かれたと考えられる。

2 実習指導者のアンケート結果から

OSCE の試行的実施の全体を通して実習指導者から挙げられた感想や意見について、次の 5 つのカテゴリーにまとめた。①評価表のあり方、②面接時間の時間配分、③事例の内容、④学生の力量、⑤今後の取り組みについての意見。このうち①②③の 3 つのカテゴリーについては、OSCE 実践のあり方に関する課題である。具体的な課題として、評価表は 5 段階が評価しやすいこと、評価者同士のすり合わせの時間をとること、面接時間は 7 分から 10 分程度にしてもよいこと、事例の内容はシンプルなものが多いこと等が挙げられ、今後改善していくことが必要である。次に、④学生の力量については、学生一人ひとりパーソナリティや持っている知識や技術も異なるため個人差が生じる内容であった。そして、全体的に「感情のレパートリー、語彙力が不足していると感じる」といった意見も挙げられた。さらに、語彙力だけでなく専門用語の理解が十分でない学生もいることから、今後は講義や演習を通してより実践的な学びを進めていくことが必要であるとする。次に、⑤今後の取り組みについての意見については、学生にとって有意義な経験であり、引き続き継続して欲しいという要望が多く挙げられた。また、実習指導者から「学生が OSCE を経験できて良かったと思えるように、実習内容とリンクさせていきたい」という意見もあり、OSCE の実践が、学生、養成校、実習施設・機関が三者協働して実践力向上につながる機会になり得ると考える。先行研究においても、OSCE がソーシャルワーク実習に向けた「勉強するきっかけ」(阿部 2016) になり、学生や指導者にも肯定的な評価がなされている(巻ら 2016)。以上のことから、本研究の OSCE の試行的実施についても先行研究を支持する結果が示された。

V おわりに

本研究は、A 大学において、社会福祉士 OSCE のインターク面接を試行的に実施し、OSCE の有効性の考察と今後に向けた課題について検証することを目的とした。対象学生は、A 大学の社会福祉士プログラムの 2020 年度入学生(試験当時 4 年生) 14 人及び 2021 年度入学制(試験当時 3 年生) 6 人の合計 20 人である。その結果、評価者評価は、合計点数 63 点満点のうち、全体の平均点は 49.3 点 (78.3%) だった。この評価を 3 つのブロックで分類し小計した結果、最も平均点が高かったのは、「面接の導入」、次に「面接の態度」、最も平均点が低かったのは、「主訴の聞き取り技法」だった。このように、学生は「主訴の聞き取り技法」の習得に課題があることが示された。また、クライアント役評価は、合計点数 18 点満点のうち、全体の平均点は 13.3 点 (73.9%) だった。すべてのインターク面接を同じ事例で実施した結果、点数の高い学生と低い学生でばらつきがみられた。その理由として、学生の資質によって評価が分かれたと考えられる。

実習指導者のアンケート結果では、今回の試行的 OSCE の取り組みについて、学生にとっては

有意義な経験であり、今後も継続して欲しいという肯定的な回答が多く得られた。このことから、学生、養成校、実習施設・機関が三者協働することで学生の実践力向上につながる機会になり得ることが示唆された。一方で、OSCE の運用面の課題として、評価表は 5 段階が評価しやすいこと、評価者同士のすり合わせの時間をとること、面接時間は 7 分から 10 分程度にしてもよいこと、事例の内容はシンプルなものが多いこと等が挙げられ、今後検討する必要があることが示された。

最後に、本研究の限界について述べる。第一に、A 大学では 2022 年頃から OSCE を試行的に実施している。しかし、教員体制やカリキュラム上の課題があり、本研究では、社会福祉士 OSCE の一部であるインテーク面接に特化して試行した。そのため、社会福祉士 OSCE の評価としては十分でないという限界がある。第二に、一養成校における試行的実施の結果であるため、一般化するには限界がある。第三に、学生からの感想や意見を反映していないことから、フィードバックが十分にできていないことがある。今後は、今回の結果を精査・検討して、A 大学における社会福祉士 OSCE のあり方について検証を重ね、試行的な実施を継続していきたい。

付記

本研究は、令和 5 年度学校法人光星学院イノベーションプログラム（基金）研究等補助金の助成を受けて実施した研究の一部である。

文献

- 阿部好恵（2016）「短期大学における実習前評価の検討－実習前評価システム（短期大学版）の試行的実施から－」『帯広大谷短期大学紀要』53, 1-10.
- 長谷川真理子（2014）『福祉専門職養成教育における実習前評価システムとしての OSCE 開発に関する予備的考察－臨床医療領域および福祉領域における OSCE の動向から－』『青森保健大雑誌』15, 39-46.
- 厚生労働省（2019）「社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」
（<https://www.mhlw.go.jp/content/000523365.pdf>, 2025.1.5）.
- 巻康弘・川勾亜紀奈・福岡麻紀ほか（2014）「相談援助実習における OSCE（客観的臨床能力試験）の開発－実施結果と学生アンケート調査から－」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』23, 1-11.
- 巻康弘・近藤尚也・川勾亜紀奈ほか（2016）「相談援助実習における OSCE（客観的臨床能力試験）試験項目の評価－学生及び評価者の調査結果から－」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』23, 33-41.
- 巻康弘（2023）「社会福祉士養成課程における臨床参加型実習経験に対する学生の認識－A 大学における 2014-2022 年度相談援助実習後学生調査から－」『北海道医療大学看護学福祉学部紀要』30, 1-11.
- 巻康弘・近藤尚也・片山寛信（2023）「新カリキュラム実習導入年次における社会福祉士 OSCE の試行－2 年生を対象とした学生アンケート調査から－」『北海道医療大学看護学福祉学部学会誌』19(1), 79-87.
- 長濱章雄（2019）「相談援助実習におけるインテーク面接に与える OSCE（客観的臨床能力試

験) 体験の効果ーチェックリストを用いた技術評価からの考察ー」『最新社会福祉学研究』
14, 85-91.

社会福祉士介護福祉士学校指定規則及び社会福祉に関する科目を定める省令の一部を改正する省
令 (令和 2 年 3 月 6 日文部科学省・厚生労働省令第 1 号)
(<https://www.mhlw.go.jp/content/000604992.pdf>, 2025.1.5).

執筆者紹介 (所属)

立石 真司 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科 講師
吉田 守実 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科 教授
大木 えりか 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科 講師
米田 政葉 九州看護福祉大学 看護福祉学部 社会福祉学科 助教